全国五百六十カ所で総決起

騒乱罪粉砕のため

自治会共闘 東西で最大限動員

ひきつづき最前線へ

一〇・二二国際反戦統一行動は学生戦線においては圧倒的な大量動員をもって闘い抜かれた。

東京では、当局の悪質なデモ権剥奪のため、集会場を明治公園から急拠、東大に移し、慶応、早大一文などの呼びかけに応えて結集した総数六千名、そのうち自治会共闘は革マル系を上まわる三千余名の大量動員をかちとった。法大社自のストライキ、学園闘争下の東大の大衆動員を軸に、関西三千とともに東西学生戦線の主力となった。

東大集会の後、国会・首相官邸にむけて行動を開始したが、機動隊は、みな間にわれわれの行動を暴力的に抑圧し、まったく、集中的な弾圧をもって、デモを見守っていたに過ぎない学生まで含めて二十数名を逮捕した。

自治会共闘部隊は、やむなく、進路を新宿にむけて、果敢なデモンストレーションを展開しながら四谷を経由して新宿周辺におもむいた。革マル系学友も含む三千余の部隊編成は少しもおとろえず、見守る労働者、市民、学生もまき込んで拍手のうずまく中で、米軍タンクローリー車がこの新宿の地を通過し、侵略加担を深めていることを暴露していった。

騒乱罪の苛酷な抑圧体制が、反戦派に対する暴徒呼ばわりの上に圧倒的なプレス・キャンペーンの中で、あたかも共同意志の下に客車破壊、放火が行われたかのようなデッチ上げに抗して、われわれが闘い抜いてきた地平をあくまで前進させなければならない。

われわれは、今回の一〇・二二ゼネストを、七月全百代の決定にもとづき、その上に、早大一文などの自治会をまきこんでゼネスト共闘として闘った。

反戦・反安保ゼネスト統一行動は、七〇年安保粉砕にむけ、さまざまな戦略＝理論の相違にもかかわらず、一定の共同行動の可能性を提示していった。この共闘は、あくまでも、われわれの基本路線に立脚した、自治会共闘運動であって、けっして特殊な固定的党派間共闘（政党間統一戦線）ではない。

従って、革マル派の諸君が、依然として革マル全学連を維持したまま、党派戦術の一環として自治会共闘方式を採用しているのであるが、わが部隊の前進と圧倒的力量の蓄積をもって、こうした諸君をも、大衆的部隊編成の下に自治会共闘運動の選択を余儀なくさせていかねばならない。

われわれの次の課題が、党派的囲い込みや反権力主義に、単純に集約させることなく、十月二九・三〇日の「騒乱罪適用抗議・沖縄奪還・安保推進内閣打倒」の集会を、さらなる七〇年安保粉砕の大爆発を用意する中で、共同で、権力に立ちむかう大統一行動として実現する必要がある。騒乱罪粉砕を通して、遅れている本土の沖縄闘争の強力な推進に全力をあげなければならない。

自治会共闘推進部隊は一〇・二一ゼネストの意義とその逆流に抗して今こそ不退転の決意をもって七〇年戦線の大衆的・戦闘的戦列の最前線にたって闘い抜いていかなければならない。」

新宿駅東口で学生に声援をおくる大群衆

関西自治会共闘

【大阪】大阪市大、大阪学芸大天王寺分校のストライキを軸に、民青のスト破けを粉砕して教養ストライキを貫徹した民学同を中心とする京都大学の部隊を含んだ自治会共闘は、全関西三千名を結集し、果敢な闘いを展開した。全関西自治会共闘は、兵庫のフロント諸君の御堂筋からの脱落にもかかわらず、この日六〇年安保以来の動員数を示した関西学生運動のなかで、量質ともに、最大の部隊として闘いぬいたのである。

この日、全関西自治会共闘は、五時に中之島公園に集結し、独自デモで扇町公園の総評集合に合流した。六百名を結集した大阪市大、民青の闘争妨害をはねのけ、三百五十名を動員した大阪学芸大を主体に、桃山大学二百五十名、関西大学百名等、京都、兵庫の部隊を合わせて三千余名のふくれあがる隊列は、一〇・二二闘争を通じてその頂点を形成して闘いぬいた。

八千名を動員し、奪権闘争の圧殺をはかった武装機動隊と対峙しながら、大阪市庁前坐りこみ集会を貫徹したわれわれは、総評が解散した後も、二十四列のスクラムを固め、車道を制圧しながら、青年労働者、高校生とともにデモストレーションを継続して、淀屋橋での二万人手に包まれて、淀屋橋での二万人の坐り込み政治集会をかちとった。シュラルミン楯で武装した機動隊も、全く手が出せず、機動隊の誘導により突っ込んできたトラックも、学生、市民の説得によって、バックするという状況のなかで行われた〝人民政治集会〟は、一〇・二二闘争の第二の頂点となった。

さらに、大阪駅に向った自治会共闘、青年労働者、高校生部隊は中央コンコースにおいて、コンコースを埋めつくした。一万人の〝人民政治集会〟を再度つくりあげ、第三の頂点を形成したのである。反安保大衆の自然発生的高揚を生みだし、御堂筋をその急進的結集地点とした一〇・二二闘争はその圧倒的な高揚の持続的展開にむけて、大衆の組織的成長の課題を提起している。関西自治会共闘は、関西学生運動の主軸として、この任務を断固としてやり遂げた。

学生各派の10・21闘争

学生戦線では、自治会共闘部隊の他に、ブント系反帝全学連の全都集会が中大においてもたれた。その後、防衛庁闘争へむかい、大量二百余名が逮捕された。

中大から出発した二千名前後の部隊は、まず、千駄ヶ谷を下車して、青山を通り、五時三十分頃、第一次防衛庁突入を敢行した。

この間、機動隊との激突はすさまじく、丸太棒、放水、ガス弾の雨が降りそそいだ。

その後機動隊に押しかえされて第二次突入を志向してか、多くの学生が分散し、また、明治公園における反戦青年委の一部が結集するいきおいを示していた。

反戦青年委、おとそ二百名を結集して闘争の意義が米タン（新宿）にではなく、中央権力闘争にあることを論調していた。

二百名の逮捕に屈することなく、さらに闘いぬいていくことを確認して八時すぎ、第二次突入を目論んだが、機動隊の壁にはばまれ、なお二十五名ほどの学生が検挙された。

第二次攻撃を断念し、その後、青山附近に分散したりしながら、十二時すぎ頃、中大へかえった。

ブントの場合、中核派のように〝拠点闘争と反帝打倒〟のスローガンに反映する傾向を批判し、目的意識的行動方針を提起しているのであるが、それが現時点において国家の暴力的中枢部を自覚させ、暴力的対決をいどむというので、明らかに早すぎる戦術行使であり、具体的な戦術＝組織論と諸階級の基本動向を無視し、現実の大衆運動をずたずたに引きさく危険性をもっている。かつて展開した運動と諸階級とその展開の過程論を放棄して、一転したプチブル綱領主義におち入っている。

中核派は、日大、明大などに陣どって、社学同ML派、社青同国際主義派なども含めて、四時以降御茶の水駅周辺で、街頭集会を行った。

その数、おとそ、千名。六時頃、代々木駅から新宿駅へむかい、八時頃、かなりの群衆をまき込んで一万人規模の大集会を開いていった。

反帝学生評議会の部隊は、デモ不許可の公安委員会決定により、早稲田大学に結集した。

それまでは、行動形態、集会場など明確なプランを必ずしも持っていたわけではなく、学生の全部隊がほぼ明治公園に集結する方向がはっきりした地点で、反帝学評としても明治公園に結集するということであったようだ。

彼らは早大で五時頃まで集会を行なっていたが、六時三十分頃、中央線千駄ヶ谷駅に早大、駒大などを先頭に、およそ千名の部隊をもって明治公園集会に結集した。これによって、明治公園の学生部隊は十月行動実行委員会（ベ反学連系の学生部隊）を中心に、社青の大衆運動をずたずたに引きさく危険性をもっている。かつて展開した運動と諸階級とその展開の過程論を放棄して、一転したプチブル綱領主義におち入っている。

中核派は、日大、明大などに陣どって、社学同ML派、社青同国際主義派なども含めて、四時以降御茶の水駅周辺で、街頭集会を行った。

その数、おとそ、千名。六時頃、代々木駅から新宿駅へむかい、八時頃、かなりの群衆をまき込んで一万人規模の大集会を開いていった。

反帝学生評議会の部隊は、デモ不許可の公安委員会決定により、早稲田大学に結集した。

それまでは、行動形態、集会場など明確なプランを必ずしも持っていたわけではなく、学生の全部隊がほぼ明治公園に集結する方向がはっきりした地点で、反帝学評としても明治公園に結集するということであったようだ。

彼らは早大で五時頃まで集会を行なっていたが、六時三十分頃、中央線千駄ヶ谷駅に早大、駒大などを先頭に、およそ千名の部隊をもって明治公園集会に結集した。これによって、明治公園の学生部隊は十月行動実行委員会（ベ反学連系の学生部隊）を中心に、社青

10・21闘争とマスコミの論調

ふたたび、昨年十月八日羽田闘争の直後を想起させるような商業マスコミ、政党マスコミの金切声の大宣伝が、ベトナム反戦、米タン阻止のために一〇・二二国際統一行動をたたかった人民の上に注がれている。いま「騒乱罪」を中心に「反戦」をとさけぶか、慎重な適用をとさけぶ（朝・毎・読）か、自分だけはかんべんをと泣きをいれる（赤旗）かのちがいしかでてこない。

これらはすべてカラ騒ぎである。大衆運動と革命は諸勢力の行動にたいする恐怖心で結ばれたことも十九日から二十一日にいたる三日間阻止された。そしてそれだけ。この三日間新宿は平和の街にちかづいた。これが事実の核心である。さらに、事実はこの大衆闘争によらずしては、この三日間、一日百二十一万ガロンのベトナム八日の新宿駅構内における危険きわまる米タンの大爆発と大火災という実例があるにもかかわらず、米タン輸送をただちに中止せよ！とどの新聞が主張し、キャンペーンを展開しただろうか。どれも何もしなかった。そうである以上、政府は「伝家の宝刀」――騒乱罪――をぬき、商業新聞は憎悪の金切声をあげるのだ。商業新聞が守っているのは、こうして「米タン列車の通る新宿の街」であり、日本の戦争加担の現実なのだ。

第一に、商業新聞も「赤旗」も黙して語らないのは、日本政府がこの日、空前の準戒厳命にも比せられる暴力的抑圧体制をしき、闘争をドカツしようとしていたことであり、このたびたたかってそれを「善意の市民」と敵対させようと必死のキャンペーンをはっているのだ。「ヤジ馬」にたいする、つまり反権力的な市民にたいする日本政府の恐怖心は、奉野警視総監のつぎの談話にもあきらかだ――「わたしは、一般都民へ協力をお願いしたのに、この日集まった群衆は、なぜ公共の秩序保持に協力してくれなかったのだろうか？」当り前だ。「公共の秩序保持」とは、「米タンの秩序」、「安保の秩序」であるとかして